

異文化交流実践を授業へフィードバック

松浦 まち子 ・ 浮葉 正親 ・ 田中 京子

I. 基礎セミナー A (前期)「多文化社会を生きる」(代表:松浦まち子)

1. 授業のねらい

外国文化を持って日本で暮らす人々に焦点をあて、彼らの視点を通した日本を知ることによって、日本社会の課題に気づき、様々な文化を持つ人々が共に生きることについて考えた。

2. 受講者及び講師

開講3年目の授業で、受講生は12名(内訳:文学部3名, 教育2名, 法学部1名, 情報文化学部1名, 工学部5名), TAは国際言語文化研究科のSeth Rajdeepさん(インド出身留学生)をお願いした。ゲストスピーカーとして岩村ウイリアン雅浩氏(日系ブラジル人留学生, 5/12), 浅川晃広氏(国際開発研究科講師, 5/19), サルカール・アラニ・モハメド・レザ氏(教育発達科学研究科外国人特別研究員, 5/26), 稲垣達也・アイダご夫妻(6/9)に参加してもらった。平成17(2005)年度は、浮葉正親, 堀江未来, 松浦まち子(責任者)の3名が担当した。

3. 授業内容

3-1 スケジュール

- 4/7 オリエンテーション, 自己紹介, プレゼンテーション実演
- 4/14 自分と異なる文化を持つ隣人について
- 4/21 インドへようこそ(TAの出身国インドの文化を学ぶ)
- 4/28 異文化疑似体験
- 5/12 異なる文化を持つ隣人たちを詳しく知ろう「在日ブラジル人の人々と文化」
- 5/19 異なる文化を持つ隣人たちを詳しく知ろう「在日韓国人の人々と文化」
- 5/26 異なる文化を持つ隣人たちを詳しく知ろう「イスラムの人々と文化」
- 6/9 異なる文化を持つ隣人たちを詳しく知ろう

「国際結婚した人々と文化」

- 6/16 発表のためのグループ分け, 発表準備
- 6/23 レポートを書く時の留意点と文献検索方法, 発表準備
- 6/30 発表準備
- 7/7 発表準備
- 7/9 (補講) 発表と討論
- 7/14 発表と討論
- 7/21 発表と討論, まとめ

3-2 口頭発表テーマ

- ・国際結婚はいいのか?
- ・日本語から見た異文化
- ・日本とマレーシアの比較
- ・外国人公務員採用問題~在日韓国人訴訟事件から~
- ・在日韓国・朝鮮人の国籍問題

3-3 レポート集

今回は受講生に留学生が多くて異文化理解には効果的な面もあったが、マレーシアの三人には日本語で書くレポートは大きな負担だったようでレポートにそれが現れていた。学部の授業を受ける彼らのためには日本語で書くことは勉強のうちと思うが、毎年「レポート集」を作成して学生に配布しているが、その際各学生のレポートに対して担当教員が書いたコメントを添付している。受講生が12名と少数であるからこそできるきめ細かい指導である。

4. 評価

3年目の基礎ゼミで、今回は、注目すべきポイントが二つあった。

一つ目のポイントは、発表を従来の個人単位ではなくグループ発表に変えたことである。もう一つは、12名の受講生に留学生が4名いたことである。過去2年間、15回の授業において、学生は授業に対して熱心ではあったが、教室内外での学生同士の交流が進まず課題の一つとなっていた。そこで、今回は試みとしてグループ発表にした。グループは、大まかに4つのテーマを設定し、学生の興味によってグループを作ったが、

5つのグループのうち3つまでが留学生と日本人の混合グループだった。このことが、発表の準備において、自然な異文化交流となり大変よかった。来年度においてもこのゼミ受講者は、留学生と日本人学生の混合グループになるように選考してもらえると、ゼミテーマの「多文化社会を生きる」を授業中に実感させることができるのでありがたい。

【参考】学生からのコメント（アンケート自由記載欄より抜粋）

- ★ 先生方が大変熱心に授業展開をしてくださり、偶然一緒の授業をとった仲間と意見交換をして、自分の考え方について省みることができとても有意義でした。ただ、毎回A4レポートが出てそれを書くのが大変でした。しかしそれにより文章を書くことに少しだけ慣れたのでよかったと思います。
- ★ 基礎セミナーが一番好きな授業です。文系・理系混合のクラスだったため様々な見方・考え方を学ぶことができました。これからは是非このような形態の授業を続けていってほしいです。
- ★ 発表が個人の発表でなくグループ発表でよかった。なぜなら、特に留学生と同じグループになり実際に異文化交流ができたと感じたからです。
- ★ いろいろな異文化のことを学ぶことができました。日本の文化をもっと知りたくなりました。
- ★ この授業では普段関わることの少ない学部の人の考えも聞けたし留学生ともたくさん交流できてとてもよい体験ができたと思っています。何より、各国のゲストの方のお話を聞くことができ感じるものがたくさんありました。この経験はこれからも生かして行けると思います。
- ★ 授業で多くに知識を得て多くのことを考えさせられました。まさに「異文化」を実感できました。後期もやりたいくらいです。
- ★ 一人一人が違うことを認め、気軽に発言できる雰囲気での学習にしてくださったことで、自分なりの考えをたくさん表現することができました。このセミナーを通して他の受講生とも仲良くなれて嬉しかったです。

II. 教養科目「留学生と日本—異文化を通しての日本理解—」（代表：浮葉正親）

1. 授業のねらい

外国人留学生と日本人学生が討論や協同作業を通じて、両者の日本に対する理解と相互の理解を深めることを目的とする。名古屋大学内およびこの地域で異なる文化を持つ人々が共に学び生きることを意味を考え直し、多文化共生のあり方を模索する。

2. 受講者及び講師

学部生は27名（日本人学生20、学部留学生7）。受講生の学部別内訳は、文学部3、法学部6、経済学部4、情報文化学部1、医学部3、理学部1、工学部9、農学部2である。学部留学生の国籍は中国3、韓国2、モンゴル1、マレーシア1である。これに10月に渡日した日本語・日本文化研修生20名（中国8、インドネシア3、インド2、韓国2、タイ1、モンゴル1、ポーランド1、イタリア1、イラン1）、日韓共同理工系留学生6名を加え、日本人学生20/留学生33、計53名で授業を行った。

平成17（2005）年度は、浮葉正親（代表）、田中京子、松浦まち子、堀江未来、高木ひとみの5名がこの科目を担当した。全15回の授業内容と担当は以下のとおりである。

3. 授業内容

3-1 スケジュール及び担当者

- 10/3 オリエンテーション（1）（全員）
- 10/17 オリエンテーション（2）（全員）
- 10/24 異文化との出逢い（田中）
- 10/31 在日留学生と日本社会（松浦）
- 11/7 異文化コミュニケーション（堀江）
- 11/14 グループ活動について（浮葉）
- 11/21 グループ発表準備（全員）
- 11/28 グループ発表準備（全員）
- 12/5 グループ発表と討論（全員）
- 12/12 グループ発表と討論（全員）
- 12/19 グループ発表と討論（全員）
- 12/26 グループ発表と討論（全員）
- 1/16 グループ活動から学ぶ（高木）
- 1/23 留学体験について考える（堀江）
- 1/30 まとめ（全員）

3-2 グループ発表のテーマ

- グループ1：愛しいわが子へ（名前の付け方）
- グループ2：ココが変だよ！日本の礼儀
- グループ3：レディファースト
- グループ4：お酒から考える日本文化
- グループ5：伝統衣装と国際理解
- グループ6：日本人の紙の使い過ぎについて
- グループ7：日本人の金銭感覚
- グループ8：冷凍食品について

4. 評価

昨年に引き続き、グループ活動に対する評価を重視し、全体の40%（発表30%+自己評価10%）とした。その他は、レポートが30%、出席10%、クラス討論への参加度10%、宿題提出10%である。グループ発表に対する評価は、五つの評価項目を作り、5名の教員による評価を15%、他の学生による評価を15%とした。結果的には、どのグループも積極的に発表に取り組み、23~28%を獲得した。発表のなかには演劇を用いたグループが3つあり、インタビューやアンケートによる調査の結果をパワーポイントにまとめたグループも多く、全体に工夫が感じられた。

ただし、グループ活動に対するアンケートには次のような感想も書かれていた。ある日本人学生からは、「グループの子たちは仲はすごく良かったし、話し合いでは全員が自分の意見を言うことができました。ただ、まとまりがあったかという点、少し悩みます。話し合いの途中で趣旨に沿わないことを発言する子がいることも多々あって、意見がまとまらないことが多かったです」という意見がある一方、ある留学生からは、「ときどきある話題を話しているとき、違うことを何となく話してしまっていて、だんだんテーマから離れてしまいました。その話は"おもしろい"話なので、みんなもついそれに夢中になってしまいました。でも、私にとっては、テーマから離れていてもムダではありませんし、いろいろなことが分かってよかったです」という意見が寄せられた。とくに日本語・日本文化研修生にとってこの授業は、日本人学生と一緒に受けられる唯一の科目である。彼らが日頃感じている疑問を日本人学生にぶつける絶好の機会であるために、議論が脱線しやすいという面があることがアンケートの結果から分かった。

17年度の反省点としては、レポートの書き方に関す

る注意が徹底しなかったことがあげられる。文末が「～です/ます」体のレポートが多く、参考文献の言及がないものが例年になく目立った。グループ活動や異文化体験について自分自身の経験を振り返るのはよいのだが、その経験を開示するだけのレポートが多いのに閉口した。もし仮にそのような傾向が最近の学生たちにあるのなら、自己の体験を他者とも共有できる普遍的な言葉に置き換える訓練が必要ではないかと考える。例年、レポートの書き方に関する注意事項を箇条書きにして渡しているのだが、学期末にもう一度念を押す必要を感じた。

Ⅲ. 大学院授業「異文化接触とコミュニケーション」: 国際言語文化研究科 日本語文化専攻 応用 言語学講座 (担当: 田中京子)

2003年度に開講した科目を継続し、3年目となった。

1. 授業のねらい

母語や背景となる文化が異なる人たちが、意思疎通をはかりながら共に生活しようとする時、どんな創造や衝突があるか、文献購読や経験学習、討論を通して考え学ぶ。

コースの中では、共通言語として英語および日本語を使用して話し合いや実習を行うことによって、言語能力が様々な人たちの間のコミュニケーションの特徴を実体験し、積極的に公平なコミュニケーションについて考察する。

2. 受講者

国際言語文化研究科日本語文化専攻・多元文化専攻の大学院生4名、他研究科の大学院生聴講1名、研究生1名、および前期に聴講生数名、後期は客員研究員1名が加わり、TA 1名と合わせて常に8名ぐらいで授業を進めた。

60歳代から20歳代までの年齢の、男女で、アジア、アフリカ、北アメリカ、南アメリカ、の7カ国の国籍の参加者が集った。初年度、2年目よりも人数が少なかったが、それだけにグループ間での交流を深め、授業の後にはいつも都合がつく人たちが一緒に食堂へ行くという関係になった。

後期に参加した研究員は日本語の初級者で、自然と授業の共通語が英語に傾いたが、参加者たちは日本語

にふりがなをつけて発表資料を配布したり、日英両語を巧みに組み合わせて議論したりという工夫や配慮をし、それ自体がよい学習となった。

3. TA

今年度もTA予算がつき、国際経験・社会経験豊かなTAが多様な参加者間に信頼関係とユーモアを生み出すことに大いに貢献した。受講者が英語で書くレポートの添削やコメント、授業への参加、発表などを行なった。

環境学研究科 D 2

モハメド・アブガイブ・アブダラさん

4. 授業内容

- (1) 経験学習（疑似体験学習、ロールプレイ等）
- (2) 事例考察
- (3) 討論
- (4) 文献購読（宿題）
- (5) 文献についてのレポート（宿題）
- (6) 発表

参加者にとって、母語であったり、第2、第3の言語であったりする英語や日本語を使用することは、それぞれの言語の初中級者から母語話者までが混在するグループでいかに共通理解をはかるかを考える実践の場となり、結果よりも過程そのものに重点を置いた授業となった。年齢、国籍、言語運用能力の異なる参加者全体の間にも生まれるコミュニケーションは、TAの機知とユーモア、年長者の落ち着き、若者たちの元気さ、などで前向きなダイナミックなものであった。

毎回宿題として出した文献購読とレポート提出に全員が取り組み、TAが言語面で補助した。使った文献の一部に参加者の一部が疑問を持ちそれを表明してくれた。教員にとってそれは、知識や経験が豊かで、学習文化が異なる参加者にも満足のゆく授業をしていくにあたっての新たな挑戦であった。

前期は異文化コミュニケーションの基本的知識を、経験学習や事例検討を通して学び、ジェンダーのテーマの時には、生涯学習センターが主催する女性セミナーと合同授業にして、大学を会場に講演・研究会を行なった。地域に暮らす比較的高齢の女性たちとの授業は大学院生たちにとって、また別の異文化コミュニケーションの経験であった。

後期は一人1時間使って専門に関わるテーマを異文化コミュニケーションの見地から発表した。発表内容は、NEETと日本社会、ミャンマーの仏教と社会、オーストラリアのアボリジニの文化、イスラーム圏社会と文化、メキシコの日本発国際学校、日本の韓国学校、中国の文化思想、中国のイスラーム、など多彩で非常に興味深いものであった。発表者は、前の時間に必ず資料を参加者に配布し、参加者全員が何らかの予習ができるようにした。（これは前年度の反省から実現したものである。）発表の後、参加者各自が宿題でレポートを書き、次の一時間で発表について全員で討論した。これによってひとつの発表に全員が取り組めるようになった。

5. 評価

教員はこれまで行ってきた国際交流関連業務や留学生相談の中で培った異文化コミュニケーションに関する経験や知識を、個別教育（相談）だけでなく授業の中でも生かすべく積極的にとり組んだ。また、この授業を逆に個別教育に還元して相談活動を発展させることも意識した。

コース後の学生による評価では、多文化環境の中で、異文化についての学びが多かったという意見のほか、言語については日本語・英語両方を使うことによって言語による自分の感覚や参加態度の違いに気付いた、世界で多くの人が使っている中国語も何らかの形でとり入れたらどうか、という意見があった。また授業の形については映像をもっと使ってもよかったという意見があった。

6. 成果発表

昨年度このコースで発表した事例と討論した内容を土台に、昨年度の参加者のうち有志5名で"Different Cultures, Different Interpretations: With Focus on Japanese Culture"の本の編纂を行なった。JAFSA(日本国際教育交流協議会)の研究・調査補助金が支給され、それを英語の添削や冊子印刷費に使用することができた。一昨年度の冊子編集と同様、編集会議を数多く持ち、紆余曲折を経て、2005年末に完成した。5名の編集者以外にも多くの協力者を得て作業を進め、その過程で学ぶことが非常に多かった。

今年度の授業では各自がそれぞれ異なる発表テーマを決めて、それに参加者全員で取り組む形をとったため、まとめとしての冊子編集は行わなかった。